

# 人間と社会

—和讃の諸問題—

金子大榮

『高僧和讃』に入ってから第四回目です。どういう題目にしようかな、「人間と社会」、或いは「人間世界」ということであってもよい。或いはもっと簡単に世界観ということであってもよろしい。この間も言いましたように、インドの仏教はそこで仏教が出来たのであって、そしてそこに最も関心を置かれたことは、自然と人間ということである、こう言っているであろう。何よりも問題となることは、自然を背景として人間生活が営まれているということがあります。これは青年時代の宗教心というものも、これであると言ってよいのであろう。それで他に考えられることは、自然の道理、或いは宇宙の根本原理とでも言いましょうか、真実を客観的に見ていこうということが一つある。それが龍樹における思想であったのであろう。しかしそれは同時に、自覚されなくてはならないということにおいて、自覚の内においてそういうことを見ていこうということにおいて、世親の教学が出てきた。その中観と瑜伽との教学から浄土教というようなものを見開いたものが、龍樹の『十住毘婆沙論』と世親の『浄土論』であるというようなことを、この間話したのであります。

ところが、中国にいつてみますと、これは移植せられたものでありまして、インド思想というものを移してきたの

であります。それが中国仏教を研究する上におきまして、非常に大事なことなんでしょう、例えば中道といううな考えでも、最初に中国人が考えた「中」というものと、それから仏教で言おうとする「中道」というものとはずいぶん異なっておる。そしてそれは、中道ということは殊に中国では天台宗で説くのでありますが、天台宗で説くところの中道というものは、龍樹の『中論』にあります中道というものと余程変わってきている。龍樹の『中論』にあるのは、空でもない、有でもない不有不空というその「中」なのでありますが、従って二諦であります。それが天台になると三諦、空仮中の三諦ということになりまして、余程意味が変わってきております。そういうことで、浄土教ということにつきましても、特に中国において問題となるものがあって、その問題を解くものとして浄土教というのを見ていこうという、こういうことがあったと考えると差し支えはないであろう。そういう点から、この曇鸞・道綽・善導を見ますと、それぞれのお念仏は異なっていますけれども、その時の時代とか社会とかというものを問題としているという点において、共通であるといつて良いのであります。その一番明らかなのは、まず曇鸞であります。曇鸞の『論註』を開きますと「謹んで龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』を案するに云わく、菩薩阿毘跋致を求むるに二種の道あり。一には難行道、二には易行道なり」と。そのうち五濁の世・無仏の時に於いて阿毘跋致を求むることははなはだ難いと、「五濁の世・無仏の時」というものを挙げて、とても難行ではできない、易行でなくてはならないということをおっしゃいます。

これは昔から言っていますように、龍樹では「行体の難」、難行易行ということは行いそのものが因難であるか、或いは容易かということであった。菩薩道というものは声聞縁覚になつてはならない。といつてあくまでも、どんな困難があつても菩薩道を買おうというのは容易なことではない。そこへいくとお念仏を称えるということは、非常に容易なことであるということ、行そのものの難、これを行体の難と言つていた。ところが、曇鸞の場合には行体ではなくて、「行縁の難」である。つまり事情が他にあるのである。行いそのものよりは、そういうことを行わせないよ

うな状態に意味を変えておることが問題となった。それを行縁の難と言っています。その行縁の難として「粗五三を挙げて以てその義を明らかにする」と、そこに五つの理由を挙げております。その五つの理由というものは、見方によっては世の中、現実の世の中というものはこの通りであるということの問題にしているのであると言っているでしょう。

第一には、「外道の相善は菩薩の法を乱る」、破るということであります。これはどういうことを曇鸞が考えていたのか、或いは曇鸞の時代においては、どういうことがこういうことを考えさせたのかということは、『論註』そのものの上からもいろいろ研究して欲しいことなんです。でも私としてはこの言葉を聞くと、そもそも現代における平和問題というようなことを思い出す。「外道の相善」、外道というのは仏教以外であります。仏教以外の相善、相善とは形あるということです。相善ということは、似せている。どこか似ているということであります。それが菩薩道と似ている。平和問題とかね、社会主義とかいうものは外道の相善であって、それは形の上から来ますからね。自由といい、平等といい、みな形の上から来ているのであります。だからして、菩薩の法はそうではなくして、大乘菩薩の精神というものは純粹精神的なのであります。だから平和という問題を提起しましても、とにかく人間が精神的に改まらなければならぬという意味を持っているのです。しかし外道の方では、その精神なんていうことを言っても、それよりはすべての権利も義務も平等、出来れば財産も平等と、こういうようなふうにみな似ている。似ていて混乱している。その混乱の事情は今更僕が説明するまでもないでしょうね。仏教の大家で平和を説く人も、結局は社会主義的な思想になっている人もあるのであります。どうすればいいのかというと、結局は外道だと言うけれども、外道のやり方に従うということになれば、それが本当に大乘精神であろうか。大乘の精神というものの平等とそれから人間の考えている平等とは違うのではないかということが、まず「外道の相善は菩薩の法を乱る」ということを考えるのであります。それから第二には、「声聞自利にして大慈悲を障える」と言うてあります。これはまあ龍樹が言っ

おられる、自分さえ救われればいいじゃないかという、そういう声聞根性であっては菩薩道に背くと言ってあるから、それをそのまま曇鸞は受けて読むのであると考えても、むしろ差し支えはないのであります。しかしもう少し我々に身近に感じますれば、いわゆる学者というようなものが声聞であるといっているのではないだろうか。よく学問的にはこうだということへ閉じこもっていて、それがどれだけ社会の為になるか、どれだけ本当に仏教精神を表わすかということになるかというところ、「声聞自利にして大慈悲を障える」と、自己に満足してそして世を救い人を救うということをお忘れてはいませんか。それから第三に「無願の悪人は他の勝徳を破る」と言うてあります。無反省ですから、無反省の悪人。他の勝徳、何かによって優れたものがあれば、すぐそれを叩き壊していこうという、そういう破壊主義というものが無反省の連中によって行われているのではないかと。第四には、「顛倒の善果能く梵行を壞す」と言うてあります。顛倒の善果というのは、ちょっとまあ都合よく出世したとか、親が金持ちになったとかいうのが顛倒の善果であります。梵行は清浄の行。梵は清浄ということでありまして、道徳を破るということに対して言うわけがあります。必要悪というようなことを言うて道徳を破っていくではないか。

そうして第五に「唯是れ自力にして他力の持つ無し」と言うてあります。この場合の他力というのは、私は本当の指導者というものが無くなってきていると解したのであります。それはその後の文章を見ればすぐにわかることなのであります。ここで「唯是れ自力にして他力の持つ無し」という言葉を、本当に教える人が無い、本当の指導者というものが無くなって、みんな結局どうにも救われないようになっていくことが、それがどうしても大乘菩薩道が行われないことではないかと、こういうふうに解しますと、この五つの課題というものは曇鸞大師の社会観であるということが言える。このようなことを私としては数十年前から言って、そして二・三度発表してみたことなのであります。そうであるとも、ないとも誰も言うてくれないのでちょっと淋しいんです。

『論註』をずっと見ていきますと、二十九種の莊嚴を解釈するのに、「仏、本、何の故にこの願を起こしたまえる

や」と言つて、ある国士にかくかくである、ある国士にはかくかくである、そこには色々な例を挙げております。例えば、偉い人の息子でも愚か者が出てきたり、とるに足らぬ者の息子でも偉い者が出てきたりということが、そもそもこの世においては混乱を起こすことになっているというようなこと。それから、職業が無くて子供たち置き手紙して、私は一週間以内に帰って来る、もし帰って来なかったならばここにお米があるからそれを食べるがいいと言つて米袋を下げておいた。親が帰って来ないのでそれじゃ仕方がないということでおろしてみたら砂袋であったというような悲惨な話が出ております。あれをずっとこう集めてね、そしてそれらの材料というものは一体どこから出てきているのか、そしてそれらの材料というものは曇鸞大師の時代とどういう関係があるのかということも私は調べてみたいと思つているんだけど、とうとうしないでしもうたのです。或いは、近頃出ました了祥師の『論註』の解釈の中に実例は出ているかも知れません。ただ私の言うような研究はしていないでしょうけれども、これはこの書物にある、これはこの書物にあるということはお出ているかも知れません。そういうものと調べ合せて、そしてこの五三の例というものが私の想像する通りに事実曇鸞大師の社会観であったということが証明されれば、それにこしたことはないであります。しかしあつてもなくても、曇鸞の『論註』を読んで我々は何を考えさせられるか、何を教えられるかということにおいては、それはどうであつても差し支えないのであつて、そうしてそれが『高僧和讃』の上にとり出ているかということを一つ考えてみたいのであります。

そうしますと、次いで出てくる道緯・善導の和讃と、それから曇鸞大師の和讃と著しく異なるものが感じられるのであります。殊に道緯禪師の場合であります、何か非常にこの世に対して悲観的であります。曇鸞はまだ希望を持って、こうして浄土を願うのである、浄土を願う者になれば、そこにこの五濁悪世においても何か光が与えられるということを考へておつたように思われる。そういうことは和讃をずっと見ますと、曇鸞大師の和讃を貫くものは、「煩惱即菩提」ということであるといつていいであらう。

本願円頓一乘は

逆悪摂すと信知して

煩惱菩提体無二と

すみやかにとくさとらしむ

とこうあります。曇鸞大師の和讃が一番長い。長いということは、宗祖にとりましても自ら親鸞と名乗られるくらいでありますから、天親・曇鸞のようにと。しかしまあ本当に大事なものは、天親の詩でありましょう。法然上人は「三違一論」と言うておられます。浄土の聖典は三部経と一つの論であると言うておられますから、『浄土論』であるに経いない。しかしながら、『浄土論』と言いましても、

天親菩薩のみことをも

鸞師とぎのべたまわずは

他力広大威徳の

心行いかでかさとらまし

とありまして、天親といえは曇鸞と一つなのであります。だから龍樹・天親が菩薩であると同時に曇鸞も菩薩であること、こういうふうには尊敬している。自らも親と鸞という一字ずつをとって親鸞と名乗られたということであって、そういう点から申しますと始めの三祖は菩薩さまである。道綽以下は大師である。菩薩というのと大師というのと分けて解釈しようとする人もあります。

そういうことで、曇鸞というものに対する敬意は非常に深いのであります。『高僧和讃』で出てくるものはたくさん和讃が引いてありますけれども、おおよそ六つあります。第一は煩惱即菩提。第二は二種回向、往相還相の回向。それから第三が三不三信。「一者信心あつからず、二者信心一ならず、三者信心相統せず」というあの三不三信の教

え。わけてもまず最初に煩惱即菩提。煩惱即菩提のことは、

罪障功德の体となる

こおりとみずのごとくにて

こおりおおきにみずおおし

さわりおおきに徳おおし

というふうにですね、煩惱は氷であってそれがとければ菩提となるのである、こういうことです。それが現生不退ということにもなっていて、煩惱の生活が本願を信じ念仏を申せばそのまま菩提となるのである。煩惱が菩提となるということは、どこまで考えたらいいか。いったい煩惱煩惱といいますが、煩悩煩悩といふことは、何か、破られたる道徳という風なものに感じられませんか。だから煩惱といふことは、その背景にすることは在家者ということだと思えます。親子兄弟という、そういう在家者でなければ煩惱といふものはあり得ない、というのは極論であります。

しかし煩悩煩悩のだから、煩悩煩悩ということになると、煩惱の内容が貪欲・瞋恚・愚痴というものが課題となる。欲のない者はない。腹がたたない者はない。貪欲・瞋恚・愚痴というものがあるということになれば、出家の人になれば、家を捨ててそしてやがて修行するということになる人になれば、欲もあるかしらなければ、在家の人より欲があるということはないであろう。憎むということも遠ざけることは出来るであろう。道元禪師の『学道用心集』を見れば、菩提心があれば愛欲なんでものは吹き飛んでしまうと云ってあります。愛欲だの名利だのなどということを使うのは、そもそも菩提心がないからであると。だから出家生活をすれば、煩悩煩悩なくもいい。悩まなくてもいいから、憎しみというものはただ本當につまらないものになってくるわけでありまして、けれども、在家者にしますとそうでない。煩悩煩悩といふことは、破れた道徳とでも言いましょうか。或いは曇鸞の譬えから言えば、氷と水であって、したがって煩悩なきものは人に非ずということも言えるであろう。甚だ困ったも

のであるけれども、しかし愛と憎しみに悩むというところに、そこに道徳感情というものがある。裏からいえば、親子兄弟というものに対する道徳感情というものがなければ、煩惱というものはないであろう。だから煩惱は、菩提の母体に違いない。煩惱が仏道だとは言わないけれど、材料のようなものであって、氷がなければ水がないというふうに、煩惱即菩提で、煩惱は菩提に非ざれども煩惱無きところには菩提が無い。それを即と。即という字は不即不離ということがありまして、不離を即という。離れないということは、イコールということのようであって、そこにはいろんな説明がいりますけれど、まあこの場合には不離、煩惱を離れずして菩提あり、煩惱を離れば菩提なしと、こういうふうなものが曇鸞の和讃には出てきています。

それから、二種回向というようなことが、

弥陀の回向成就して

往相還相ふたつなり

これらの回向によりてこそ

心行ともにえしむなれ

と、浄土へ往くということと、それから浄土から来るといふこととの往相・還相の二つの道というものを説こうとすることも、還相ということとは、これも凡夫らしいことなのでありまして、浄土より他に救いはないということも凡夫の要求である。従って、覚りの場が与えられれば、還り来たってそして道を求める人の背後の力となるうということが出てくる。くわしくここで説明することはよめますが、とにかく煩惱即菩提、或いは往相還相、そして三不信心で「一者信心あつからず、二者信心一ならず、三者信心相統せず」ということを説いてあります。全て浄土を願うことによって、その浄土の光がこの世を照らす。そこに現生の救われる道がある。浄土を願うことによって、現生が救われるのであるという感情を与える。浄土を願うことが、現実の世の中の救いとなるという意味が和讃では

つきりしているのであります。

しかしそれが、道綽禪師にいきますと、何かこうすっかり感じが変わってきて、そうして非常に暗いものが出てくるのであります。今出てくる時に、先生方が編集された七高僧の伝記をちょっと開いてみたのですが、道綽禪師の時には廃仏ですね、日本にも廃仏毀釈ということがあったのですけれども、あんなものじゃない。坊さんなら生かしておかない、寺は壊してしまう、大仕掛な廃仏の時代であったそうであります。なるほどなと考えさせられましたね。道綽禪師のお書きになった物には、全然この世への期待というものはなくて、ただ悲観、この世はただ悲しむべきものという厭世思想だけがはつきりしているようであります。それが善導大師の上にも、善導大師は道綽禪師のお弟子だという事でありますからはつきり移ったのでありましようが、そういう悲観的なものがはつきりと出てきているのであります。五濁悪世であるということは、曇鸞大師もいまの五三の事由にもあります。「外道の相善は菩薩の法を乱る」とは、見濁であるということも言えるでしょう。無願の悪人が他の勝徳を破ったり、或いは顛倒の善果が能く梵行を壊すということも、煩惱濁であるとも言えることができるであろう。しかし五濁という姿をはつきりと打ち出して、そうしてそこに時代、殊に道綽禪師には時代観というものが出てきております。正像末の三時というようなことを言って、そうしてもう今日は末法の時代であって、いわゆる鬪諍堅固で、仏法が減びるといような時代である。こういうことを強調されているのであります。だから考え方によりましては、曇鸞大師のお説きになることよりは道綽禪師がお説きになる方が、もっと現代に身近であるということが言えるのではないかと思えます。実際、仏教などは無視されていて、そしてあらゆる精神的なものは考慮されていないという、それが殊に曇鸞よりは道綽にこそ、現在何かを考えさせるのであると言いうことが出来るでありましよう。出てきた時代という問題があります。

時代が変わっても世間は変わらない。確かにそうですね。新時代の要求に応じよとか、もう仏教は現代に間に合わないと言いますが、現代のようない時代でも、世の中相変わらずだ。今行われている悪徳は、昔だってあった

んであります。徳川時代が良かったですかといったら、まあ大した違いはないです。今と同じ事をやっているのですから。世の中というものは、お釈迦さまの時代であった、親鸞聖人の時代であった、私達のように明治に生まれた者は明治時代を謳歌しますけれども、やはり明治時代にも人をだます人もいたし、人を殺す人もいたし、詐欺をした人もいるし、まあ世の中というものは変わらないものである。世の中が変わらないものであるということは、曇鸞大師によって教えられる。しかし時代観と言われると、そうかしらんと。時代というのは現代ですから、現代というのは現に当面する時なんだから、だから世の中は変わらないというところ、どこかに呑気なところがあるのですけれど時代はと言われると身に迫るものが出てくる。そこで時代が変わっても世間は変わらないという思想も頷かれますけれども、しかしそうかといって、時代を考えようとか、時代を要求せよという声が虚しいものであると考えることは出来ない。かえってそこに何かがあるということが、道綽禪師のわずか五首でありますけれども、あの五首の和讃をずっと見てごらん下さい。

濁世の起悪造悪は

暴風駛雨にことならず

諸仏これらをあわれみて

すすめて浄土に帰せしめり

一形悪をつくれども

専精にこころをかけしめて

つねに念仏せしむれば

諸障自然にのぞこりぬ

縦令一生造悪の

衆生引接のためにとて

称我名字と願じつつ

若不生者とちかいたり

真宗学を研究する者は、だいたい曇鸞と善導であります。これはまあ当然そうあるべきことでありまして、いろいろと問題を与え、そして真宗教学としての思想体系は七高僧いるにしましても、要するに曇鸞と善導であります。だから諸君は、学部で習ったのは、たいてい善導と曇鸞でしょう。『選択集』は、これは師匠の法然上人の著作であるし、また善導を知る上においては知っておかなくてはならないのです。だから曇鸞を学ぶことにおいて天親を学び、善導を学ぶことにおいて法然に接することでありまして。まあそこへいくと龍樹・道綽・源信といこの三人は、あまり科目の中に出てこないようですね。しかし考え方によっては、その三人の方にもっと重大な問題があるかもしれない。私は道綽・道綽の『安楽集』というものに親しみを感じる。中身は曇鸞と少しも変わっておりません。曇鸞大師の『論註』に言っていることはみな『安楽集』に言っていることと同じです。しかし組み立てが変わっている。中身は同じこととありまして、しかも組み立てが変わっているところに一つ注意すべきことがあると思うのであります。従って、安楽というのは、ある意味で純粹であります。二種回向のかわりに、ただ純一に浄土往生を願っておるという点において、きちっとした書物であります。明らかに厭離穢土で、この世を厭うことをもって貫いてあります。それは確かに悲観的であります。しかし悲観するということは、我々の宗教感情において最も重要なことではないであろうか。『法華経』にあったと思うのですが、「常に悲感を懐く」と。悲感というのは悲しみですね。確かそこに、医者のお話が出ている。お医者さまの子供が、親が亡くなってそして親を感じずというような話が出てきた。どこにあったかは忘れませんが、「常に悲感を懐け」という言葉だけ覚えておる。仏法を求めるといふのは、悲しみの感覚というものを持たねばならないということとあります。それは厭世主義だと言いかもしれないけれども、しかし実際ではないであろうか。

仏教徒は如実知見で、正直に物を見て行くことである。正直に見て行くということ、これが仏教というのでないであろうか。近頃は何か今さら思いついたように未来の世界ということを言われる人もいるのですが、思いきって悲観する人もあります。思いきって絶望的なことを言う人もあります。そういうことから見ると、悲観がないです。それであなたはどうするんですかと聞くと、別に何も考えていないようでもあります。どうにかなるんだっていうことのようにあります。まあそこには道綽禪師の時代と、また我々の当面する時代と、時代感覚の違いがあるのかも知れませんが、とにかく世の中はこうしたもんだということよりもっと迫っている時代観というものがあって、その時代観というものが道綽禪師の上において出てきているのであります。そしてそれを受け継いでの善導でありますから、善導の上にも煩惱即菩提というような思想が出てこない。あくまでも浄土往生一点張りになっているということにおいて、そこに自ずから道綽・善導系の思想と天親・曇鸞系の思想と、あたかも二つあるかのように考えられる。二つの水晶とさえ言おうとしている人もありました。しかしそうであろうか。宗祖親鸞もそう考えていらしたであろうか。

そういうことを考えていこうという時になると、いわゆる上三祖、龍樹・天親・曇鸞の上三祖というものと、それから道綽以下の下四祖というものと、上三祖下四祖という思想が昔からの教学者にありましてね。系統からいえば『大經』系と『観經』系である。道綽・善導の二祖は『観經』系であることは、これは明らかです。道綽も『観經』を何遍も一生の間に講義されたということがあります。善導は有縁の法に会いたいということで大蔵經に入って、そしてそこで『観無量壽經』を与えられたということですから、善導にとりましてはただ『観經』だけである。仏教多しといえども、『観經』だけが善導にとっての唯一の仏教であったのです。だから、その善導を「偏依善導」と言われた法然上人も、『観經』系であったということができ得るであろう。そうすれば『往生要集』も念仏の名において、観念も説いてあるのでありまして、あれもまあ広い意味において『観經』系であると言えるかもしれない。そうすれば下四

祖は『観経』系であるということは、まずもって明瞭であります。そうしますと上三祖は『大経』系であって、まあ中心となるのは『浄土論』ですが、『無量寿経優婆提舍願生偈』と言ってありますから、まず『大経』の精神を『浄土論』で簡単に述べられたものと考えていい。それを解釈された『論註』でありますから、そしてさかのぼって龍樹もまた決して『観経』的なことはないのですから、『大経』系であると言っていいのであろう。こういうことから言うと、七高僧の上において二つの系統があるのだということを言うことが出来るかもしれません。

更に考えてみますと、上三祖の上においては『華嚴経』がよく出てくる。龍樹の『十住毘婆沙論』は『華嚴経』の解釈であります。世親の『浄土論』には、蓮華藏世界というものが出てきている。あの蓮華藏世界という考え方は、おそらく『華嚴経』から来ておるものであろうと思われれます。従って『論註』にも、『華嚴経』に云々ということが出てくるのであります。さて、その下の四祖にまいりますとどうであろうか。源信僧都の『往生要集』は、あらゆる経典を引用してあるのですから、そこに『華嚴経』が出てくるのはこれはまあ別に不思議はないんですが、道綽・善導はどうか。道綽禪師は「涅槃の広業さしおきて」、だから『涅槃経』によって道を教えられたに違いない。そうすれば善導大師には『涅槃経』的な思想がないかとちょっと考えてみましたけれども、ちょっと見当たりません。『大経』と『華嚴経』、『観経』と『涅槃経』ということとは、これはまあ明治時代の学僧も皆そういうことを言っておりますから、そういう点から言いましたも何かこう二つの流れがあるということは言えるようであります。しかし私は、宗祖親鸞におきましては、それが一つであったのだということも明らかにしておきたいのであります。つまり、曇鸞系の思想は菩薩道の思想であると言いますが、結局善導流のはっきりと凡夫であるという、浄土往生より道がないというその立場を徹底しなければ、決して煩惱即菩提も出てこないし、現在不退も出てこないであろう。ですから書かれたものを見ると道綽・善導の方は当面するところは非常に暗い。悲しみを述べてあるようでありませけれども、往生浄土を説くことになりませうとかえって明るい。大涅槃の境地として浄土に生まれれば、そこに涅槃の境地を開くのであ

るといふ、そういう機会を望むという点においては、もっとも明瞭であると言ってもいいでしょう。

さてこういうことにして、いろいろ申したのでありますが、曇鸞・道綽の二祖において、道綽を善導におさめるか、或いは善導を道綽におさめるか、今は曇鸞・道綽ということにしておきましょうか。曇鸞・道綽のこの二師において考えられることは、人間世界ということである。或いは社会、仏教徒はこの社会をどう考えるかということについて我々に教えるものは龍樹・天親でもなく、また日本の源信・源空でもないであろう。ただ中国の三祖が、世の中とか或いは時代とかということを考えようとするためには、大きな役割となるのであるということを考えることにしていますね、『高僧和讃』を学ぶところに、自ずから『高僧和讃』がそれを表しているということが、はなはだ意味の深いことであると思うのであります。

そういたしますと残るところは日本でありますが、日本の源信と源空。この二人は古来有名で、インド・中国に仏教というものがある、その尊いものを日本に輸入しようではないかということで、輸入ということが最初であったに違いない。だからだいたい国家的だったのですね。国家に仏教を仕入れると、それで国家が安穩になるといふ、国家仏教であったのであります。聖徳太子を始め、伝教でも弘法でもつまり国家仏教であって、国家というものと仏教というものをおそらく伝教大師や弘法大師のほどにまで結びつけようというのが、インド・中国には無かったのではないかと思ひます。いや、ちよつと考えておったかもしれない。龍樹・天親も考えていたかもしれないし、また国家に対してこの法を広めさえすればそれで国家が安らかになるのであるとちよつと考えていたかもしれない。要するに社会観ですから、人間世界ですからね。人間世界というものを構成していくときになると、国家というものが出てきます。だから国家安穩のためには仏法を、ということであったに違ひがない。それが大仏を造ったり、国分寺を造ったりしていたころの大きな理由であったのでありましょう。そしてそれが、それだけの役をもっていたに違ひない。寺を造ったってどうなる、国分寺というのがどんな役を果たしたかといへば、過去の成績はよく分かりません

けれども、しかし事実として寺を建てれば国家安穩になるといふことはあり得ることなのであります。

ちよど寺の鐘のよなものでありまして、戦争に負けてそして人心が大乱した時に、あなたがたのお寺でもお鐘を取られたんですから、鐘堂を作り直して、そして鐘を作り直すと、それで村の人々も心がおさまったということを知っております。それはそうでしょう。鐘をついて鐘が鳴る時には、動乱がみな休まるという事実がある。私は昔の話をしようでありますけれど、実は戦時中にもそれを語ったことがあるんですよ。鉄砲をこしらえるより、お鐘の方がどれだけ役に立つかわからない。そんなこと言っていて、どうして括っていかれなかったかと言う人がありますけれども、寺がちよど安全地帯にあったもので、そういうことを言ってもある点まで自由な立場におったのですけれども、そういうことは言えないようなことなのです。軍艦が国家を担うか、或いはお寺の鐘が国家を担うかということになると、お寺の鐘をつくということが動乱の人生を安んじていくということでもあります。だから今日人間というのは立つところがない。人間を取り戻すといいますが、やがてそこまでいくと、また寺を建てたり、鐘堂造ったりすることが一つの方法だということになるかもしれません。ちよどと余談が入り過ぎたんですが、しかし実際になってみますとというと国家を担うといいますが、依然として乱れる世は乱れる。国家安穩、四海波静かになると言っている間に、源氏だ平家だというふうには、鎌倉幕府が移りゆくその姿を見て、そして初めて個人というのが問題になってきたのであります。その個人というものをどう考えるかという、そこから源信と源空を考えていきなさいと思っております。そしてその二師において考えてみたいことは、私がいつも申します問題の教養と信心ということであります。源信僧都において我々がいう教養、宗教感情の教養と信心とを考へる。それから法然上人において、教養というような回りくどいことではなく、直接に汝の信心を決定せよということになる。そういう源信と源空、この二つを明日の題目にいたします。

(これは、一九七〇年一〇月五日大谷大学大学院での集中講義の筆録を整理したものである。文責編集部)